

# 産地力という強み。そして信頼という絆

先人たちが築き上げてきた飛馬ブランド。それは、消費者から受ける絶大な支持と信頼の証。相馬が持つ産地力を活かして農業所得増大へ。産地一体となって今後も取り組むことの大切さを共有したい。

「相馬」はリンゴに特化した地域であることから、相馬村が弘前市と合併した今でも「相馬」という産地名を残している。リンゴに特化した地域として産地力を維持していくためにも、JA出荷で産地力強化及び消費者からの支持を維持していくことは重要なことである。農業所得増大が目標であることは基より、消費者から評価される産地というのが大事であることをもう一度考えてみたい。

「相馬のリンゴは美味しい。」そんな声が県内外の消費者から聞こえてくるようになったのは、いつからだろう。少なくとも、今に始まる

たことではないが、コクのある旨みや品質の高さなど様々な視点から高い評価を受けている。これは、長い年月を掛けて築き上げてきたからこそこの声である。

全国各地で展開されている飛馬リンゴの販売キャンペーンにおいては、その場でお客様から「相馬のリンゴが好きで毎年購入しています。」などといった率直な意見を頂き、産地力の強さを実感できていることも周知しておきたい。その言葉は、まさに信頼の証であると云えよう。試食をせずに手に取ってもらえるのだから。



ひとつひとつ人の目で品質を見極める

## 消費地から選ばれる産地を これからもずっと守り続けたい



光センサーで内部も見逃さない

また、キャンペーン以外の通常販売においても、スーパーの店頭では「青森県産」という表示ではなく、「JA相馬村産」という飛馬ブランドの強みを活かしたPRがされている。青森県産という中でも、JA相馬村産というのは特別であると言っても過言ではないだろう。一方、市場においては、仲卸業者の鋭い眼差しのおかげに厚い信頼が隠れている。競りが行われる前に、サンプルが1箱ずつ置かれるのだが、仲卸し業者は入念な

特集  
相馬という名の  
産地力



チェックをしてから競りに臨む。しかし、JA相馬村産のリンゴについては、開封されないまま置かれているものもある。それは、中身を見なくても高品質であることを理解している仲卸業者との深い信頼関係の現れである。飛馬ブランドは「むつ」で築き上げられたが、ここで一番重要なのは生産者が一丸となって高品質生産に取り組んできたことだ。相馬のリンゴをJA相馬村産として出荷する意義はここにある。そして、商品に対する信頼を築き上げるまでもなくとも長い道なのであるものの、信頼を失うことは一瞬であることから、JAの選果基準が厳しい理由もここにある。生産から販売までJAが力添えできる環境がJAの利点でもあり、ただ単に販売するだけでなく消費地の声を生産現場に届けて消費者ニーズに合った販売を可能にしていることは大きな利益の一つと感じる。

## 相馬の特色を大切に

リンゴ王国「おおもり」。しかしながら、リンゴは世界各国で作られている。ましてや、輸入リンゴ



威勢の良い掛け声で飛馬リンゴが競り落とされる  
(東一東京青果)



競り前の品定めに熱い視線が注がれる

は低価格で食味も良好な時代が到来していることは我々にとって脅威だ。ここに危機感を持っている人は、どれだけののだろうか。

国内生産量第一位を誇る「ふじ」。これもまた、日本だけで作られているわけではない。また、海外では、気候と広大な面積、労働力を最大限に活かした栽培が主体となり、農業分野においても大量生産という時代を迎えている。温暖化や労働力不足といった栽培環境の変化から、日本は大きな壁に行く手を阻まれているようにも思える。

しかし、手間をかけてひとつひとつ丁寧にリンゴを作ることは、我々日本人にしか出来ない職人技でもある。同じ「ふじ」であっても当JAの高糖度・濃赤色が魅力の「飛馬ふじ」が消費者から高い支持を受けている理由はここにある。労働力不足の環境においては、時代に逆らっているように見えるが、食味や品質などで勝負できるのは我々の強みであり、高品質生産の重要性は「むつ」で多くを学んだはずだ。他産地と比較されることなく、

は信頼と特徴も失うことになりうると言ってもいいだろう。

しかしながら、労働力不足という大きな壁は避けて通れない。これはJAにとっても対策は急務とされており、事業の中でも非常に重要視されている。JAの努力がより一層求められる時代の中で、組合員の声を反映させながら、この問題解決に向けて取り組み、産地強化に反映していく次第だ。品質と共販率の向上は長年の目標である。